

# 1 木育とは

「木とふれあい、木に学び、木と生きる」取り組みです。



利便性や経済効果の追求等によって、生活環境と自然環境の変化が生じています。人と人、人と自然、モノと自然のつながりが希薄となり、社会や自然に「ほころび」が生じています。

3つのほころび

- 1 最近は、お父さんが日曜大工で本棚を作るなどの話を聞かなくなりました。「作るより買うほうが安いから。」
- 2 鋸やトンカチを家で使う機会が無い子が増えました。「使う場所が無いから。」
- 3 木材を使って自由に創作する経験を経ない子供が増えています。「テレビゲームのほうが楽しいから。」

多くの人が言います「木って良いね」。住宅などでも、多くの人が木のある落ち着いた暮らしに関心を持っています。しかし、その中に、使われている木材の生い立ちに思いを致す人がどれだけ居るでしょうか？遠く海を越えて、地球の裏側で育っていた木が、化石燃料をたくさん消費して遠く日本にやってきているのを。

森林資源の保全と活用のバランスがとれた「木の文化」は、古来受け継がれてきた日本の文化であり、「適材適所」に木を使ってきた知恵と技(わざ)によるものです。

しかし、現在の私たちの社会に「木の文化」がしっかり継承されているとは言えません。知っていますか？木材は持続可能な資源です。自然と人間の力が合わさって再生される循環資源です。北海道の森林も、適切に管理され、利用されることが必要です。人との関わりがあってこそその自然であり、森林なのです。

そんな背景から、人と人、人と自然との関わりを見直し、次の世代へ木の文化を引き継ぐために「木育」というキーワードが生み出されました。

木育とは、子どもをはじめとするすべてのひとびとが、「木とふれあい、木に学び、木と生きる」取り組みです。子どもの頃から木を身近に使っていくことを通じて、人と、木や森との関わりを主体的に考えられる豊かな心を育むものです。

木育の取り組みは、平成16年に北海道と道民による「木育推進プロジェクトチーム」により検討され、北海道発の新しい言葉として発信されている取り組みです。

## 2 今回の取り組みについて

上述のように、「木育」の推進は生活環境や自然環境を豊かにするために不可欠であり、人々が、様々な機会を捉え「木」にかかわる機会を増やしていく必要があります。

このような中、中学校においては、年々技術課程の授業時間が減少していることなどにより、技術の授業において木工の時間が取れなくなったことから、生徒が木に触れる時間が減っています。

今回は、この中学校技術課程にターゲットを絞り、生徒に対し、道産の木材による、地域の森林に密着した内容の授業を展開することにより、地域の森や木材に愛着を持ってもらうことを狙いとして、取り組みを進めました。

現場の先生、教育委員会などの教育関係者、市町村、道などの行政関係者と木材関係者が意見を交換し、学校での木育を推進するに当たっての課題、そして木育に相応しい教材の試作、モデル的な授業などを実施しました。

## 3 ステージ



北海道は広く、自然環境も違います。また、地域によって教育環境もさまざまです。今回はモデル地域として3箇所を選定し、それぞれの事情にあった木育の展開を試みました。



道内3箇所でネットワークを構成

**木材関係者** ●北海道木材利用推進協議会(事業主体)  
●木材加工業等

**教育関係者** ●学校、教育委員会等

**行政関係者** ●北海道、市町村等

ネットワークを構成  
意見交換、教材開発、モデル授業等を実施